



川端康成文学碑

# 戸隠神社

## あをがき

### 青垣

平成30年[春夏号]  
戸隠神社発行  
〒381-4101  
長野県長野市戸隠3506  
026-254-2001  
<http://togakushi-jinja.jp>

戸隠 去来抄 第八回

### 戸隠と川端康成「牧歌」

尚綱学院大学教授 田村嘉勝

戸隠に赴いた「作者」は「古い神官の家の娘」である「知子」に、

「日本の故郷を書かうとお思ひになつて、奥信濃までいらしてゐるんですのね。」

と、言われる。

文人と戸隠

### 川端康成

ここでの「作者」とは小説「牧歌」の主人公で、生身の作者川端康成の分身と考えていい。

川端が最初に戸隠を訪れたのは昭和十一年十一月八日であり、二度目は同月二十三日で、この時は戸隠を経て鬼無里村鬼女紅葉伝説の岩屋に向かう。そして、三度目は昭和十二年九月二十九日、柏原からバスで戸隠に向かい、その晩は戸隠中社久山家に泊し、翌日、奥社、牧場を見る。これらの訪問をもとに、川端は「婦人公論」(昭和十二年六月〜十三年十二月)に、「牧歌」を発表している。その後、川端は「牧歌」の第二章「戸隠の巫女」を一つの作品として読んでもらふつもりで、昭和十四年十二月、改造社版『川端康成選集』全九巻本の第九巻目に収載している。

この「牧歌」は信濃を書いた文献、地元新聞等を多く作品化した、いわゆ

るルポルターージュ的な小説である。ところで、川端は何故戸隠を訪ねたのか。彼の発言では「信州の小説は、まあ四五年前がかりでゆつくり書くつもりだから、そのうち鉦脈にもぶつかるといふと楽しみにしてゐる」という程度なので、それほどはつきりした理由もなく、性急な訪問でもなかった。しかし、文中の「鉦脈」とは何か、信濃の歴史、伝統、風土、人情、いずれも明確ではない。あるいは小説に書かれた具体的な内容ではないが「日本の故郷」を探し求めに訪ねたのか、詳細はわからない。その「牧歌」には、次のように書かれている。



「牧歌」挿絵 当神社太々神楽の巫子の舞が描かれている。「婦人公論」(昭和12年11月)

戸隠には、古都のやうに、美しい子供がゐる。その典雅清麗の面差の子は、礼儀正しく、山は厳しく、水清く、少女の髪は黒く、少年の唇は赤く、お宮のお寺じみた家は、柱が太く屋根の萱が厚い。

そして、神社での巫子の舞については、

開いた舞扇の骨を握って、右手の鈴を振って、単調な笛と太鼓につれて、なんといふ単調な舞だ。そして、なんといふ無心の舞だ。古い世の人形の舞を夢に見てゐるやうだ。  
単調で無心であるゆゑに、それは典雅優麗で、遠い王朝の乙女の舞だ。

と、表現している。戸隠は伝統と歴史に彩られ、それらに支えられた風景が川端の目に容赦なく映った。手力雄命が天の岩戸を引き開いたという伝説のゆえなのか、とにかくすべて「日本の故郷」に収斂(しゅうれん)されてしまう。川端は、この戸隠を延いては奥信濃を紹介したくて、というより紹介することは自身の戸隠を理解することになり、それはすなわち「鉦脈」を探索し、「鉦脈」の中身を発見することになる。川端は郷土文献として乙部泉三郎の『信濃御巡幸録』、田中貢一の『信濃の花』等、また戸隠に関しては勿論『古事記』をはじめ、「戸隠昔事縁起」等を読みこなしている。また、昨今の信濃、そして戸隠を知るために「信濃毎日新聞」を隈なく調べている。「遠山部隊の尊き犠牲者」(昭和十二・九・二十九)、「保定付近の大激戦に温井部隊名譽の戦死者」(昭和十九・九・三十)はいずれも信濃出身者の犠牲を報道し、戦局著しい現実を書いている。

一方、「作者」が「日本の故郷」を書きに来たのに、「知子」は、「私は故郷を出て行かうとしてゐますのに……。」という。戦局が逼迫(ひつぱく)しつつあ

※あをがき(青垣)とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。



太々神楽 巫子の舞

る往時の日本を物語っている。「軍歌」一色の東京とは違って、この信濃には「牧歌」があつたはずなのに、しかし、現実にはその「牧歌」も消え、銃後と化してしまい、伝説の奥社も、すでに兵隊の安否を祈願するようになってしまっている。かつての「日本の故郷」は喪失してしまつたのである。その変わった信濃の日常は郷土文献や地元新聞を引用し比較しながら書き綴られている。川端が当初求めた「鉦脈」はとうに失せてしまった。伝統と歴史の戸隠に、「牧歌」は消えてしまつたのである。

この「牧歌」とほぼ時を同じくして『雪国』が断続的に発表されている。『雪国』の作品舞台は越（古志）である。信濃を訪問しながら、川端は越を訪ねている。「日本の故郷」を一方に信濃に求めながら、また一方に越に求めている。東京で「軍歌」に辟易した川端は、「牧歌」のある信濃に、また越に「日本の故郷」を求めようとした。だが、それらはすべて幻視・幻想でしかなかつた。

川端は、「牧歌」に戦争を書いているながら、『雪国』には戦争を書いていない。「牧歌」は精力的に歩いた川端の当時の精神位相を探るのには欠かすことのできない作品としてあり、彼の代表作『雪国』と対置させて読まなければならない。



本号は、著者のご了解を得て、一面の上段の図版を差し替えました。川端康成文学碑は、昭和48年、戸隠小学校本校、宝光社分校（当時）に建てられました。

『戸隠の巫女』が、『川端康成選集』第九巻（昭和14年12月 改造社=刊）に収められた後、初めて独立して所収された単行本『高原』（昭和17年7月 甲鳥書林=刊）。装幀は堀辰雄。

### たむら よしかつ氏 プロフィール

宮城県生まれ。大学、大学院を通じて川端康成を研究。「牧歌」論文執筆のため、数年にわたり長野県全域をまわる。現在、宮城県名取市にある尚絅学院大学教授。

## 柱松神事

七月七日（土） 前夜祭

八日（日）

十二時半 特別祈祷

（中社社殿）

十四時十五分 神事開始

（中社広庭）

柱松神事は、例祭の後の「火祭」として、奥社、中社、宝光社の神々の依代である幣束を火にかざす形で継承されています。当神社の縁起『戸隠山顕光寺流記並序』に「煩惱業苦を焼盡し」云々と、この神事についての記述がみられ、その起源は鎌倉時代までさかのぼることができます。

江戸時代末期に中断された「柱松神事」を復活させるべく、当神社に残された文献や近隣の博物館に収められていた「絵巻」などを参考に、その意義、様式などの研究を進め、平成十五年、古式に則り復元を遂げ、以降三年ごとに斎行されております。この神事では、戸隠講の皆様はもとより、広く崇敬者の皆様の祈願の趣を記した「祈願串」を奥社、中社、宝光社に見立てた大松明の下で、密教で行う護摩と同じ手法でお焚き上げします。

火祭りとして、祖先供養、年占い

等「柱松」を立てる行事は全国で見ることができませんが、当神社や、飯山市の小菅神社で行われている五穀豊穰、天下泰平を祈願するものは大変珍しく、民俗学的にも貴重なものとされます。

当日は、一山の聚長（神職）総出仕により「特別祈願祭」「行列」「松山伏の入峰修行」「験比べ」「火祭り」「直会」が行われ、明治初頭にその姿を消した修験道の聖地・戸隠が復活します。

この日だけの「特別祈祷」が行われ、「柱松特別授与品」もお受けいただけます。

